徳富蘇峰関係資料1

田中良一「蘇峯先生談筆記」

解題　伊藤彌彦

蘇峰先生談話：昭和廿二年十一月廿二日　午前九時から十一時半迄、熱海市伊豆山押出、徳富家書斎に於いて

昭和廿二年　　月　　日蘇峰先生から、同志社図書館へ、先生著書編述等の一大蒐集である山本文庫[1]が寄附せられた際、小野〔則秋〕図書館主任、田中〔良一〕庶務主任に一度面接して置き度いことがあるから、両名を熱海まで出張させてくれまいか、との先生の希望が湯浅〔八郎〕総長宛通じられた。その後更に湯浅総長、牧野〔虎次〕前総長にも、篤と面談御願したいことがあるから、至急熱海へ来てほしい。小野、田中両人も同伴が便利である。いつ来てくれるか。との書簡が十一月初め到来したので、十一月廿二日（土）朝参上するとの回答が発せられた。

超えて午前八時四十五分、湯浅総長、牧野前総長、小野、田中両主任は徳富家を訪ねた。直ちに書斎に招じられ、午前九時から先生の話は始まった。左記は其の概要筆記である。

尚お当日一同は御心尽くしの午餐と夫々記念の品を分與せられた。牧野先生は正午前、其他は午後二時辞去した。

昭和廿二年十一月廿二日夜　東京神田の旅宿に於いて

筆記者　田中良一

今日はご遠方の所態々（わざわざ）、御越し下さって恐縮である。当方から御伺いせねばならぬ筈であるが、何分足が悪くて外出できないのでおいそがしいところ恐縮ながら御越しを願ったわけである。

今日は身体の調子が非常によい。四、五日前は話も出来ない程痛んだ。若し廿二日に御越し下さっても、お話も出来ないとあってはいけないと思い、別に口述して書いておいたものがあ

るのであるが、今日は非常に調子が良くて話すことが出来るから、先ず私の希望を簡単に申し上げてみたい。

第一、私はもう一度同志社へ帰りたい。

私は明治十三年五月に同志社を飛び出した。当時十八歳であった。今は後二年で八十八歳を迎える。丁度中間七十年を隔てて八十八になれば同志社へもう一度帰り度い。其時同志社は私を迎えてくれるか何うか。これをお伺いしたい。御承知の通り今日本全国には追放〔公職追放〕者と云うものが沢山居り、私もその一人である。だから同志社で重要な地位を与えられることはむつかしいかもしれぬ。然し何著かのかたちに於いて私を同志社なる団体の身うちへ入れてほしいと切望しているのである。十八歳の時飛び出して、八十八歳になって帰ると丁度一生涯のけりが附くと云うわけである。

第二、若し同志社で私が……同志社出身の一人として、敢て誇る程の出身者でないとしても……日本の文化に相当貢献した者であることを認め、その貢献を記念する蘇峰記念館とでも云うものを設けてくれぬだろうか。

その記念館に納めるものについては、私の力の及ぶ限り内容充実をはかりたいと思う。新島先生の御用いになった聖書、先生の書簡、『近世日本国民史』の原稿全部、其他の私に関する重要書類、日本の政治、文学、新聞界、其他各界の知名の士と取り交わした書簡類の重要なものをそれに納め度い。

それから私は予てから、八十八歳になったら修道館を建て、

そこには自分の恩人、横井小楠、勝海舟、新島襄三先生の記念品と、この三先生には及ばぬが、父淇水翁の遺品を納めたいと計画していた。然しその予定地であった山中湖の双宜荘隣接地が進駐軍に接収されたので、此の計画は不可能になった。

それで同志社に計画してもらう蘇峰記念館にお客様としてこの計画を併せて加えてもらいたいと思う。

そして此の計画に同志社が賛成して呉れれば、その上で又此の記念館の利用、運用について協議したいと思う。

第三、私は新島先生とは切っても切れぬ縁がある。今でも個人的に誰が一番親しいかと云えば先生である。先生ともう少し付き合いをしたかった。然しそれは叶わぬことであったから、せめて死後地下に於いて、お付き合いしてみたい。

それで私の骨の一部を若王子の墓地に埋めてもらいたい。同志社で墓地を選定し、葬式をし、受理をしてもらえば本望である。坂上田村麻呂が将軍塚から皇城を守っている如く私も新島先生のお側に在って同志社を守りたい。

以上三つのことが私の悲願である。私と新島先生との間柄を知らぬ人は虫の好いことを云うと思うかも知れぬが、客観的に見て、私の希望は同志社に迷惑をかけるものではなく、私もこの計画の成就を有難く思い、同志社もこれをよいことに思って然る可きものと思うのである。

早稲田大学には坪内〔坪内逍遥〕の演劇館がある。私は同志

社に対しては、坪内が早稲田で出来なかった種類の貢献をしていると思っている。同志社に斯(こ)う云う風の風変わりな人間が出来たのだと云って記念しても世間へ対して恥ずかしくない程度のことはあると思う。或は又、これか成就に依り、若干の者は私の風を見て起(た)つと思う。極く安く見積もっても。私の希望は同志社に害を与えることは無かろう。但し成否は同志社の理事者諸君にお任せせねばならぬことであるが。

× × × × ×

私と新島先生との関係は、改めて申すと、私は先生から可愛がられたから先生を世に推しひろめたのでは無く、私の方から先生を可愛がったのである。私の方が積極的であった。私は先生を好いたものであるから、先生は私を可愛がったので、弟子の方が積極的に師を愛敬したのであった。この間の事情は世間の者は知らぬが、私は先生の前に立って、はっきり申してもよいことである。

私は明治九年に同志社に来ました。……牧野先生はいつお生まれになったのでしょうか……（牧野曰く　明治　年に生れ、　年に同志社に来て　年間新島先生のお世話になりました…）[2]……それより前に、佐々木信綱の夫人の実家の藤島に居て、横井〔時雄〕は開成学校に、私は東京英語学校（第一高等学校の前身）に居た。（当時新渡戸とか内村鑑三とかは何うやら同級に居ったものらしい。その証拠に内村が、私が級で下位の方に居たことを証する珍しい文書があるからやる、と云っていたが、その内内村も亡くなり、遂にその文書は見ずじまいである。）其の当時、金森〔通倫〕が京都の同志社に行っていた。そ(そ)して新島と云う珍しい名前も、金森を通じて聞いていた。其処(こ)で私は菅正敬と云う名前を用いて、金森に度々同志社のことを聞いた。横井の在学した開成学校と、私のいた英学校とは、地域が鍵の手になって隣りあっていたので、毎日のように、東京はつまらぬ、と云って横井と話し合っていた。そのうち到々〔到頭〕東京をやめて同志社へ行く決心をし、藤島夫人に預けてあった参拾円を引き出し、叔父に当る人に、これから京都へ行くと挨拶した。叔父は非常に反対した。引き留められて、正午になりそばなど御馳走になったりしたが、遂に車に乗って新橋駅に行き、京都へ向った。

京都では直ちに金森を訪ねた。その時分、デヴィス先生が御苑の柳原家の館に住み、金曜日には祈禱会があったので、金森につれて行ってもらった。祈禱が終ってから、各々感想を述べるので、私も述べた。何故に京都へ来たか、と云うことを述べた[3]。それをお八重さん、新島夫人が聴き、先生に報告があったと見え、その翌日先生に会うことになった。今残っている新島邸ではなく、新烏丸頭町(しんからすまるとちょう)の元の家であった。その時先生から、薩摩芋で作った羊かんを二つふるまわれた。寒い時であるのに、夏の着物を着て、ふるえていたものだから、紀州ネルのシャツを二枚もらった。

先生と私は、二十歳年がちがっていた。先生はストーブをた

いて、ガウンを着て居られた。初対面早々、此の人こそ私、師と仰ぐ人だ、よい所へ来た、と感じた。その印象と考えが今日迄残っている。

先生は私をえらい人間だと見られたわけでは決して無い。東京から飛び出してきた、変わった青年だと見られたのみである。其れから五年間、同志社に居た。先生には満足であったが、同志社そのものには失望禁じ得なかった。

大分話が長くなったが、今少し追加して申せば、先生に対して非常に失礼なことをした。

その一は、先生の夫人を攻撃したことであった。演説会などで、盛んに攻撃した。今から考えると少年活気で失礼なことをしたと思う。然し攻撃するに就いては、当時の私にも、言い分があった。私は当時先生を非常に尊敬していた。所が夫人は先生のことを「ジョウ」と云ったり、又時には手を先生の頭にやって、撫でたりする。私にとっては斯ることは夫人先生を冒涜するものとして、大いに攻撃したわけであった。先生にはそれがわかっていたか何うか、何うやらわかっていたようであった。

その二は、同志社を出る時旅費が無いから、借用を申し込んだ。先生は非常におこられた由である。徳富の顔は千枚張りである。同志社を踏みつけて出て置いて、更に旅費の借用迄申し込もうとは……。この話は先生の甥、公義から聞いた。当時の私は、新島先生は、先生に謀反して去るような者にも、旅費を貸すほどの雅量のある方と、先生を高く買っていたのである。

尊厳を冒涜して申し込んだのではない。むしろ先生を買いかぶってしたのである。先生は許さなかったが、然し稍々これに近いことをした。

それは、京都を発つ前日先生に御別れに行った。先生から写真を貰った。その写真はこれである。（と現物を湯浅総長に示し、更に牧野前総長へ…）翌日愈々京都を去る。荷物をもって朝早く先生の邸前を通った。せっかく通るのに素通りと云うこともあるまい、と思って立寄った。先生は一寸上がれ、と云う。応接間に通った。すると先生は、東京行きは思い止まれと熱心に勧める。私は、これはとてもいかぬ、と思ったが、先生の言葉に対し反対するわけにはいかぬので、友人の川辺〔河辺久治〕のやり口などを丈〔栖？〕に論難して防御線を張った。こんなことに永い時間がかかり到々〔到頭〕正午近くなって、三条大橋のたもとへ行った。正午になったから飯を食った。愈々代金を支払おうとすると、見送って来た新島公義が支払うという。公義が云うには、あゝ云って飛び出して行くが、せめて飯の一杯でもふるまってやれ、と伯父が金を呉れた、と云うのである。私もその時は、先生はえらい、東京行きは断念して、もう一度同志社へ帰ろうかと思った。然し、やはり飛び出した。

斯くて同志社を飛び出したが、先生には一点のうらみも無い。たゞ感謝あるのみである。新島先生は、私のみ特別に可愛がられたのでは無い。何の生徒をも同じように深く可愛がられた。それで誰もが皆、自分が一番可愛がってもらった、と思ってい

る。

先生が嘱望せられた人は、横井時雄、下村孝太郎などであろう。私は何か毛色の異なった人間で、脱線さえしなければ、何か御用に立つ人間になるだろうと、目をかけて下さった程度である。さきにも述べたが、先生が私を可愛がったのではなく、私が、先生を思ったのである。私が先生を十思うと、先生は私を三思った程度であろう。私はいつも先生に対し、一目どころか幾目もおいていた。そして先生に対し、未だ曾つて敬意を失したことは無いのみか、先生には済まぬ、と云う考をいつももっていた。

湯浅総長の叔父吉郎は、私の謀反の時の仲間の一人であった。私と共に飛び出して東京へ行き、安中へ帰ったが、二日も経たぬうちに、当時下谷の練塀町に居た私を訪ねて来た。そして曰く「安中へ帰ったら、兄貴〔湯浅治郎〕にひどくしかられた。お前は徳富にだまされとる。早く同志社へ帰れ……。と兄貴が云う。君に離反してすまぬが、自分はすぐ京都へ行く……」と。そんなことで湯浅は同志社へ帰った。

然し私は、その後も上方へ行くと、必ず先生のところへ立寄った。明治十五年には先生の宅に泊まり、更に湯浅〔吉郎〕、横井〔時雄〕と共に、先生のお供をして、中山道を下ったことがある。その時でも、横井だけは先生から特別待遇を受けていた。今から思うと、横井などはもう少し先生に尽してもよいだろうと思う。それでも、キリスト教の一点に関しては、私も特に注意を受けていた。横井は実に可愛がられた。横井が余り可愛がられるから、少し焼く気持ちも起る程であった。奥亀太郎などは大いにそうであった。中山道の旅でも、横井の身は先生と共に馬に乗るが、私共は歩くのである。

中山道の旅の話で思い出すのは、宿を取って風呂に飛込んだ、すると突然湯気の中から先生が、「徳富君」と云われたので、びっくりして裸のまま風呂から飛び出した。その時は随分おかしかったと、湯浅がよく覚えていて、いつも話していた。先生と御飯くらいは共に食べるが、裸になって御湯を共にすることは考えもつかぬことである。私は先生を尊敬する一方で、からかったりすることなどは一度も無かった。

私が同志社に在学した五年間及び、飛び出した時のことは先生の御心を非常に悩ませたと思うと、悔恨の情禁じ得ない。先生には、何とかして報ずるところが無ければならぬと思っていた。ところが、先生は同志社大学設立の運動を始めた。当時私は『将来之日本』を出版して、日本の文壇に一の地位を得、又『国民之友』も湯浅総長の父君、治郎君が満幅の支持をしてくれて、うまく行っている時であった。私も及ばず乍ら先生の運動を支援する事になった。

当時先生は日本での募金運動に失望して、アメリカへ行こうとした。私は先生に勧めて、もう一度東京でやってはと云った。それから三ヶ年、衷心より先生を愛敬し、先生に奉仕した。先生も私の気持ちを知られたと思う。

失礼な言い分であるが、私は始めから先生に奉仕した。先生は十数年経って始めて私の奉仕を知られたのかもしれない。私には何か報いたいと云う考があり、それが最後に私を同志社へ帰えらしめようとするのであるから、先生も此の度の私の同志社復帰の悲願を喜ばれるだろうと思って、皆さんに今日の御願いをすることになった。

私は名誉も何もいらぬ、御恩報じのため同志社へ復帰したい。何(ど)んな役名でもよろしい、名誉小使でもよろしい、同志社の団体の中へ帰ることが出来ればよい。

話は以上にして、湯浅、牧野両先生から私の申出に対して何う云う風にしていただけるかを御遠慮無く仰っていただき度い。

× × ×

右に対し牧野前総長から、墓地の問題に関しては十月常任理事会決議の模様(もよう)を報告し、同志社復帰の問題に就いては、先生の御身分のこともあり充分研究の上御答申し上げたい旨答え、記念会館の問題は何れ理事会に諮(はか)った上、御厚志を難有御受け致し度い旨答えた。

又湯浅総長からは「記念館及び復帰の件は八十八歳になってからと仰っしゃるのですか」との問に対し、同志社で受諾さえしてくれれば、八十八を待たぬ、殊に記念館の内容となるものの如きはどしどし整理を進め、同志社へ送付したい、との答があった。

先生は更に話をつづけ、

東京に両親子供等の墓があり、故郷にも三百年来の祖先の墓があるので、それ等にも分骨せねばならぬ。東京と郷里と若王子と三ヵ所に、私の墓は出来ることになる。横井小楠は二つ、魏の曹操の墓は七十幾つある由であるから、三つ位あってもよいだろう。扨て墓碑の文字であるが、誰に書いてもらうと云う宛も無く、郷里のは自分で書いて既に郷の者に渡しておいたから、同志社のも書いて置こう。東京のは又その時のことにして。地域も今から区廓して置いて、周囲との調和も乱さぬようにして、設計してもらいたい。墓を建てる時は塩崎〔彦市〕氏が手伝いに行く。

× × ×

私は新島先生によって、世に紹介せられたのではない。私は私を自ら紹介した。寧ろ私が先生を世に紹介したと思っている。私は随分先生を教育した。読む本なども私が選んで先生に読ませた。浮田翁などは、徳富が先生を堕落させた、と云う。無論よい意味で云うので、私が先生に色々なことを教えたことを云うのである。

× × ×

私は先生の風格が気に入っている。人はああ云う風にありたいものと思ってる。あの風格の先生の門人であることは非常に光栄なことである。私は先生の門人として十二の使徒の仕事はしなくとも、ポーロ程のことはしてみたいと、いつも思ってい

た。先生は、自分の後継と思っていた人々からは裏切られたが、手におえんと思った人からは随分恩返しを受けている。

× × ×

私の先輩中に、ほんとうに先生のことを思っていたのは、浮田〔和民〕翁位であろう。後輩中には、先生、與し易し、と考え、到々〔到頭〕先生を理解することが出来ず終った人が多い。私は、いつ迄も後をかえりみ、三条の橋のたもとから七十年目に帰えることになるのであるが、それも先生の感化力である。

× × ×

私が先生ともっと長く共に居たら、私は先生にもっと感化を与え、私も先生からもっと感化を受けたであろうと思う。このことは先生に対してものみでなく、他の政治家連中に対しても云い得る。然し勝海舟先生にだけは当てはまらぬ。

× × ×

内村鑑三と先生は相当交渉があった。先生が度々同志社へ呼ぼうとせられた。

× × ×

皇室の純潔と云うことに付いては、先生は大いに貢献があると思われる。先生は、一夫一婦は先ず皇室から始めねばならぬと、井上馨さんに勧めた。当時井上は非常に勢力があった。他の何の政治家よりも勢力があった。それが大正天皇に於いて実現し、現在はあのように立派な御家庭を御持ちになるようになった。先生は信ずるところを実に勇敢に云った。

× × ×

私は先生の短所を知っている。然し、それを差引しても、先生の長所は尚お残る。先生は世界に誇るに足る人物であった。クリスチャンとは斯様の人をや云う。伝道心の汪〔旺〕盛なるは実に世界第一と云える。

以上

（1） 山本文庫：蘇峰会会員で徳富蘇峰に私淑いていた故・山本二郎は、蘇峰の大小にわたる著作や文章類を綿密丹念に収集して来た。蘇峰の親友木崎好尚の斡旋で、令息山本嗣明からそれを買い上げた蘇峰は、さらに自著全部を取り揃えた上で、齊藤弔花を使いとして、一九四六年九月二二日に同志社に寄贈する旨申し出た。同志社常任理事会は九月三〇日それを受理する決定をした。

なお、今日同志社大学図書館に所蔵されている「同志社徳富蘇峰記念文庫」は、この山本文庫を第一部とし、蘇峰永眠時、熱海の晩晴草堂の枕頭の置かれていた愛読書や書類等を第二部として構成されている。

（2） 牧野虎次

明治　四年七月　三日　滋賀県蒲生郡西大路村生れ
明治二〇年九月　同志社英学校入学
明治二五年六月　同志社英学校卒業
昭和一三年一月　同志社財団理事
昭和一三年七月　五日　同志社総長事務取扱
昭和一六年七月　七日　同志社総長
昭和二二年三月三一日　同志社総長辞任、四月一日付理事に選出
昭和三九年二月　一日　死去

（3）「徳富は同志社へ来ると、自己の意志が弱かったがために、東京へ遣られたことを泣いて話した。これはその場にをった人の談である。」青山霞村『同志社五十年裏面史』五八頁。

（4）若王子墓地の中に蘇峰の墓を作る件は、すでに十月二七日の理事会で、総長・理事会長に一任されていた。

（解題）

本稿は同志社大学社史資料センター所蔵「田中良一文書」のなかにあった手書きの文章の復元である。翻刻に当たっては、原則として旧字は新字にし、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。解読に当たっては同志社大学人文科学研究所の田中智子先生のご協力を得た。

筆記した田中良一は同志社大学職員で、戦前から戦後にわたり牧野虎次、湯浅八郎、大塚節治総長時代に総長秘書室勤務の経験のある文芸肌の職員で、同志社資料の収集、保存にも携わっていた人である。

戦前戦中期の徳富蘇峰は、大日本文学報国会会長、大日本言論報国会会長に就任するとともに、東條内閣においては顧問格の地位にあった。また毎日新聞社賓のポストにあって、『国民新聞』に比して飛躍的に多くの読者数を有する全国紙に「近世日本国民史」を連載するとともに、コラム欄にて時事論を展開し、皇室中心主義の世論指導に大きな力を発揮していたのであった。

しかし、敗戦によって徳富蘇峰の運命は逆転した。昭和二〇年一二月二日にA級戦犯容疑者に指名されたが、持病の三叉神経痛激痛のために収監を免れて、熱海の晩晴草堂に自家拘禁、閉門蟄居の身となった。昭和二二年四月八日には戦犯容疑者として財産差押え処分を受けた。同年九月一日に戦犯容疑者としての自家拘禁を解除され、晩晴草堂の門を開いたが、公職追放は続いており、解除されたのは、ほぼ一番最後の組に属する昭和二七年四月一八日であった。

本稿は、この悲境時代の昭和二二年一一月二四日、蘇峰からの要請で、元同志社総長牧野虎次、現同志社総長で蘇峰の甥にあたる湯浅八郎、総長秘書室の田中良一、図書館資料係の小野則秋の四名が熱海を訪れた時の記録である。

近年徳富蘇峰『終戦後日記』全四巻、講談社が出版されたことで、〝あの戦争〟や敗戦後に対する蘇峰の感想、見解は明らかにされたが、本記録は個人的な身の処し方が語られている点で注目される。この中で蘇峰は次の三つの要請をしていた。

第一、同志社に何らかの形で所属したい、名誉小使でもいい。

第二、蔵書、書簡類、原稿などの資料一切を寄贈したいので徳富記念館の設置。

第三、若王子墓地の新島先生の傍に自分の墓を作りたい。

ところで戦前・戦中から戦後にかけての私立大学苦難の時代に、ずっと同志社総長の地位にあって組織を支えたのは牧野虎

次であった。この歴史的変動期に総長職をつづけ、同志社大学の組織を守ったことは、牧野虎次に老練ですぐれた行政手腕が備わっていたことを示している。

戦前期・戦中期における牧野総長は、私立大学に対する国家管理が強まる中、同志社大学の存続のために、徳富蘇峰の政治的、社会的権威を活用する行動をしばしばみせた。たとえば、昭和一五年一一月八日、日比谷公会堂で開かれた「新島先生生誕百年記念一億挺身精神運動講演会」に徳富蘇峰を呼んで、講演「日本精神と新島先生」を依頼したのもそのひとつであった。また蘇峰を介して東條内閣に、同志社大学存続を訴える文章を提出したが、その一件には田中良一も参加していた。

さて、蘇峰の三つの申出に対して、同志社側は三番目の希望には応じることを即答したが、後の二つは検討事項として持ち帰ることにしたのであった。

一番目の徳富蘇峰の同志社復帰の希望を認めることは、公職追放者を採用することになり、GHQの意向に反する事項に当たる。理事会記録には、この復帰問題についての明確な記録は見当たらない。ただ三年も経過した昭和二五年九月四日の同志社理事会における懇談事項のなかに、「徳富猪一郎氏申出の件、(イ) 新島会名誉会長の件」、という項目がある。正規の教職員待遇ではなく、極めて形式的な名誉職の提供を構想した様である。またこの日の理事会協議事項のなかには、「徳富蘇峰氏米寿祝賀の件」という議題が挙げられ、新島先生の大学設立運動、戦時中の大学維持問題、新島夫人老後と蘇峰翁との関係を考慮して、金二〇万円を米寿祝賀会に寄贈する提案がなされた。その件は次の一一月理事会で正式決定された。戦時中の大学維持問題に対する恩義に対して、金銭で報いたとも考えられる。

ただし金銭に関しては、蘇峰の側も受け取るばかりではなかった。蘇峰は戦後三度同志社を訪問したが、その最初は『近世日本国民史』全百巻完成を記念して、熊本県水俣の故郷へ里帰りした帰途、同志社に立ち寄った時であった。昭和二七年五月一九日夜半、京都駅に着いた九〇歳の蘇峰は、大塚総長に金一〇〇万円を寄付している。他にも晩晴草堂や山中湖の別荘・双宜荘など、同志社は多くの寄贈を蘇峰から受けている。

二番目の徳富記念館の申し出は、同志社側においても魅力的なものであった。熱海での懇談の直後、昭和二二年一一月二八日に開催された常任理事会では早速、湯浅総長、牧野理事会長の出席の下、「蘇峰記念館に関する件」が提案され、蘇峰記念館準備委員会が設置された。準備委員長に牧野虎次、準備委員に若松兎三郎・島本徳三郎・大沢善夫・奥村龍三・千田民衛の名前がみられる。

その後の記録を追うと、昭和二四年二月六日の臨時常任理事会において、蘇峰記念館のための独立家屋の建設は、資金的に当分無理、記念館のスペースとして新築計画中の大学大教室を当面充当することになった。昭和二五年一一月二五日に開かれた理事会記録には、「新島会の件」という協議項目があり、秦

孝治郎理事から徳富猪一郎氏の近況、会見模様の報告のあと、文献の同志社への寄附交渉は秦理事に一任することになったという記録がある。結局、同志社側でこの蘇峰の申し出た資料を受取った形跡はなく、蘇峰記念館も実現しなかった。

申し出にあった資料中、膨大な量の各界名士や政治家からの来簡は、蘇峰の秘書塩崎彦市によって管理されることになり、現在、神奈川県二宮にある徳富蘇峰記念館が所蔵している。全百巻に及ぶ『近世日本国民史』の膨大な量の手書き原稿は、東京都大田区が管理する山王草堂記念館に飾られている。蘇峰が亡くなった時、枕頭にあった愛読書や一部の書簡等のみが、熱海に急行した田中良一氏によって記録され、遺言により同志社に寄贈された。それが徳富蘇峰記念文庫の第二部を構成している。

「同志社徳富蘇峰記念文庫目録」の巻末に付された小野則秋図書館整理課長の「跋文」には、「湯浅前総長、田中現監理部長及び筆者の三人が呼ばれ、昭和二二年一一月初冬の陽ざしを浴びながら翁の居間で午餐を共にしつつその事を約した。この中には翁が畢生大著作である『近世日本国民史』の原稿及び、翁が生前明治大正昭和三代に亘る日本の各界名士から寄せられた数多の書翰全部挙げて同志社に寄贈される約束で、同志社としては記念館を建て、保存の万全を期し、広く後学学生諸君の閲覧展観の便を図るよう、特に名士書簡については一部分表装してはあるが、大部分が未表装で、このままでは将来散逸の恐れもあり、取扱にも困るであろうから、今後自分の日用を節縮してでも何とか表装して寄贈するようにしたいと約束され、又自分の没後は遺骨を若王子山頂の敬愛する新島先生の墓辺に葬って欲しいと座談的に遺言されたのもこの時の事で、当時を追懐して筆者の印象は今尚新なるものがある」と一二年後の昭和三四年に書いている。今日、徳富蘇峰関連資料が全国数か所に分散所蔵されている状態を考えると、つくづく惜しまれるのは徳富記念館計画の流産であった。

なぜか、この小野課長の跋文の中では牧野虎次前総長の名前が欠落している。これは、たんなる偶然のミスなのか、あるいは意図的な省略であろうか。戦前・戦中期に徳富蘇峰に接近して右傾化していた牧野虎次が、戦後になると平和を希求して、いち早く「国際宗教同志会」（事務局同志社）を結成していた。戦後の牧野が、徳富蘇峰から距離を置いたという複雑微妙な両者の関係が象徴されているようにも感じられる。同志社史としては、この点の解明も今後の研究課題であろう。